

4 月第 3 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 4 月 21 日（日）10：30～11：30 復活節第 4 主日
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ヨハネによる福音書 21 章 15 節～25 節（新約 p211～212）
- 説教題：「 あなたは、わたしを愛しているか 」
- 讃美歌：51 「 愛するイエスよ、」
483 「 わが主イエスよ、ひたすら 」

本日の聖書箇所、ヨハネによる福音書第 21 章 15 節は、「食事が終わると」とはじまります。この食事は、先週お話ししたように、ティベリアス湖畔において、復活した主イエスが弟子たちのために用意して下さったものであり、弟子たちはこの食事において、復活して生きておられる主イエスと共にいる喜びを深く味わったのです。その食事の後で、主イエスとシモン・ペトロは会話を始めました。主イエスはペトロに、三度繰り返して「わたしを愛しているか」と問われたのです。ペトロはその度に「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と答えました。主イエスのこの三度の問いかけには深い意味があります。それはこの福音書の 18 章に記されています。主イエスが捕えられ大祭司の屋敷に連行された時に、その中庭までついてきて辺りの様子を伺いつつ寒さをしのぐために僕や下役たちと炭火にあたっていたペトロが、門番の女中や周囲の人々から「お前もあの男の弟子の一人ではないのか」と言われて、三度「違う」と言いながら主イエスとの関係を否定したという出来事です。そのような弱いペトロに、主イエスは三度「ヨハネの子シモン」と彼の名前呼びながら、「わたしを愛しているか」と問われたのです。

私はこの問答を長い間、次のような解釈でとらえていました。元のギリシャ語で見ると、主イエスがペトロに「わたしを愛しているか」と問われた内の最初の二回は、「愛する」を意味する言葉として「アガパオー」が用いられています。聖書において「愛」を表す名刺「アガペー」の動詞の形です。それに対してペトロが答えた「主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」の「愛している」は「フィレオー」という言葉です。その名詞の形は「フィリア」となります。ペトロの答えは三回共「フィレオー」ですが、主イエスの問いは二回目までは「アガパオー」で三回目は「フィレオー」となっています。この言葉の変化に意味を見出している解釈があります。「アガペー」は聖書において、神の愛、見返りを求めない無償の愛を示す言葉であるのに対して、フィリアは人間同士の愛や友情を示す言葉だと考えられるので、その違いをここに読み込むというものです。主イエスはペトロに、「わたしをアガペーの愛で愛するか」と問われ、ペトロはそれに「あなたをフィリアの愛で愛しています」と答える問答が二

度繰り返された後に、主イエスは三度目には問いの言葉を変えて、「わたしをフィリアの愛で愛するか」と問われた、ということになります。つまり主イエスは、元々は「アガパオー」という言葉を使ってペトロに神の愛に応える完全な愛で主イエスを愛することを求めておられたが、ペトロはそれに対して、わたしがあなたを愛している愛は人間としての弱さや欠けをもった愛でしかありません、という思いを込めて「フィレオー」という言葉で答えたというのです。主イエスは三度目には、ペトロのその思いを受け止めて、問いの言葉を変えて下さり、「あなたの愛は人間としての弱さや欠けのある愛だ。それでよい。その愛でわたしを愛するか」と問い直してさった、つまり求める愛のレベルを下げてペトロのレベルまで近づいて下さったのだ、という私にとっては非常にわかりやすく納得のいく解釈でした。

しかし、最近になって、「アガパオー」と「フィレオー」の意味をそのように区別する必要はなく、同じことを別の言葉に言い替えて語ることは聖書においてよくなされているということに気づかされました。主イエスが三回目の問いで、求める愛のレベルを下げて下さってペトロのレベルまで近づいてくださったというのなら、主イエスのその三度目の問いにペトロが「悲しくなった」はずはないからです。むしろ「やっと私の気持ちを理解してくださったのですね」と喜ぶのが普通のような気がします。しかし彼はこの三度目の問いを、これまでの二度と同じ内容の問いかけとして受け止めたのです。つまり、主イエスが三度同じことを問われたので「悲しくなった」のではないのでしょうか。ここで私たちが注目しなければならないのは、三度という応答の回数です。主イエスのことを三度知らないと言ってしまったペトロに、三度このように問いかけることによって、彼から「あなたを愛しています」という答えを三度引き出しておられることです。ペトロは、三度主イエスを「愛しています」と言うことによって、今度こそ主イエスを愛し、従っていく者として新しく生き始めることができたのではないのでしょうか。つまり彼はこのことによって、主イエスを裏切り関係を拒んでしまった大きな罪を赦されて、新たに歩み出すことができたのです。復活して生きておられる主イエスが、ペトロの罪を赦して、ご自分を愛する者として新しく生かして下さったということ、この話は語っているのです。あの食事の後にこのことが語られていることに意味があります。主イエスを知らないと言ってしまった罪を悔い改めて、主イエスを愛する者になったことによってあの恵みの食事に招かれたのではないのです。復活した主イエスが恵みの食事に招いて下さり、主イエスと共にいる喜びを味わわせて下さった、その体験の中で彼は罪を赦され主イエスを愛する者として新しく生き始めることができたのです。

もうひとつ、大切な言葉が語られています。それは「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と二度答え、三度目には「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられ

ます。」というペトロの答えです。ある方は、彼のこの答えを「『わたしは、あなたが罪人であるわたしをなお愛して下さり、赦して下さって、新しく生かして下さいることを知っています。あなたのその愛によって、わたしはあなたを愛することができるのです』という信仰の告白なのです。ペトロはもはや、自分が主イエスを愛していることによってではなくて、主イエスが、深い罪にもかかわらず自分を愛し、赦して下さいることのゆえに、主イエスを愛し、主イエスに従って生きることができる者とされているのです。」と語っています。

ところが、ペトロがそのように新しく生かされたと描いているヨハネによる福音書は、21章の20節、21節で、いわばこの福音書の最後の最後の場面で、次のようなペトロの姿を記しているのです。「20 ペトロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、『主よ、裏切るのはだれですか』と言った人である。21 ペトロは彼を見て、『主よ、この人はどうなるのでしょうか』と言った。」とあります。私は、ここに私自身の日々の歩みを指摘されているような思いがいたします。それは、どんなに主イエスから赦され愛されていてもなお、いつも「この人はどうなるのでしょうか。あの人はどうなるのでしょうか。」と常に他の人との比較の中で生きている私自身の姿です。そのような私に、主イエスは「わたしの来るときまで彼が生きていることを、わたしが望んだとしても、あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい。」と語り続けておられるのだと思います。この呼びかけを真摯に受け止め、心に刻んで生かされる日々でありたいと願います。